



ドアを開けて、男が入ってきた。僕はその男をすんなりと迎えた。――どうして僕がその男をすんなりと認めたのかはよく分からない。・・・多分、それが夢だったからだろう、と僕は思う。そう、きっとそうに違いないのだ。それは夢だ。・・・だが僕はその時、それを知覚していなかった。ただぼんやりとそう予感していただけだった・・・。

男はゆっくりと僕の部屋に入ってきて(それは僕の部屋だった)、立っていたパジャマ姿の僕の肩に手を置いて(その時、僕は自分自身を、つまり「僕」を見ているような感覚だった・・・)こう言った。

「お前はもう十分働いた。とりあえずそのベッドに座って、ゆっくり休みなさい」

僕はベッドに座った。僕は男を見上げた。・・・男はジェントルマンの出で立ちで一シルクハットと茶のスーツに身を包んでいた。もし素面――つまり夢から覚めていた状態なら、「気取ってやがる」と内心嘲っただろうが、僕はそんな気はしなかった。僕はその格好を「すんなりと」認めていた。

「君はよくやったよ。本当によくやった」

と男は立ったまま語り始めた。

「君はよくやった――本当によくやったよ。・・・ところで、この世界の他に何個別の世界があるか、君は知っているか？」

と男は僕に聞いた。

「わかりません」

と僕は答えた。

「数え切れないぐらいだよ。全く数え切れないぐらいだ」

と男は答えた。

「数えられないんだ。この世界の、君達が使っている数字では。まあ、井戸の中の蛙には井戸の外が見ることはできないと言えば分かって貰えるかな？」

「わかりません」

と僕は返した。

「・・・まあ、いいさ。そのうち、君もわかるようになる。君も遊星と遊星の間を・・・まあ、そういう運命になるってことさ」

そう言って男はシルクハットを被りなおした。

「話を続けよう。この世界とは別の世界がある。それを君は知っているね？」

「はい」

と僕は答えた。なぜだか知っているような気がしたからだ。

「それは君の古い記憶が覚えているからだ。人間にはまだまだ神秘的な可能性が残されている。・・・まあ、それもあと少しの事だが」

そう言って男は自分の時計をちらと見た。

「この時計の意味、分かるかね？」

「いいえ」

と僕は答えた。

「・・・そうだろう。君達は実はね、この時計の意味を分からずに使っているのだ。これがどういうことか分かるかね？」

「いいえ」

と僕は答えた。

「そうだろう。・・・君達はまだ「分からない」という事が「分かる」という事に気付いてはないからね。・・・まあ、君達の内何人かは気付いた人がいるがね。例えば、その内の一人がデカルトだ。デカルトは知っているね？」

「少し読んだことがあります」

「・・・よろしい。では、デカルトの成し遂げた事で最も賢い事は何だと思う？」

「・・・何でしょう?方法序説では・・・「我思う故に我有り」が有名ですが」

「それが一番だと思うかね?」

「・・・はい」

「よろしい。ではお教えしよう。それはデカルトの内、最も愚かな部分と私達にとっては言わざるをえないのだ、ということ。なぜだかわかるかね?」

「・・・いいえ。教えてください」

「・・・よろしい。それはね、こういう事だ。現代の君達にはとても信じられない事だろうが、彼の最も優れていた部分というのは神様を信じていたという事だ。それも、ただそれを哲学的に信じていたという事ではない。彼は全く盲目的に神様を信じていた。同じ時代の他の民衆と呼ばれている人達と全く同じ仕方だね。・・・そして彼が方法序説を書いた、という事は彼の中では全く馬鹿げた、愚かな事だったのだ。そしてそれ故に彼も偉大——つまりは私達と同一の仲間に入り入れられる資格があるかもしれない、と考えることができるのだよ。これがどういうことか、説明して欲しいかね?」

「はい」

「よろしい。君も知ってる通り、この世界は反転した世界だ。反転した世界の一つと言っている。反転した世界はいくつかあって、そしてまた反転した世界の中で反転した世界もある。・・・まあ、この世界は反転した世界の訳だ。君も知ってる通り」

「はい」

「この世界は知者は愚者として扱われ、もっとも愚かな物をもっとも優れた者と崇められる。誰よりも臆病な人間が独裁者として力を振る舞い、もっとも強い者・・・即ち「勇気ある」者として現れるのだ。・・・この事は知っていたね?」

「・・・はい」

「よろしい。正にこの世界はそう言った訳だ。・・・だから私がさっき言った反転した世界と言ったのはそういう事なのだ。この世界でもっとも賢かった、そして賢い人物とは誰か分かるかね?」

「・・・ソクラテスなどでしょうか?」

「いいや、違う。全く違う。(そう言って男は少し首を横に振った)そうではない。それはね、存在しなかった者だよ。・・・存在しなかった者。例えば、ここに間違っただけの世界が一つあるとしよう。それは既に間違っている事が知者には知れている。・・・それは癌の末期のようなものだ。君達の世界の比喩で言えばね。・・・それはもう手遅れなのだ。既に世界は反転して半時間を過ぎている。・・・私達の世界での時間だ。それはもう末期症状を過ぎて、治癒不可能なレベルにまで到達している。・・・だとしたら、この世界で生まれようとするかね?知者は?」

「生まれる権利などがあるのですか?人には?」

「もちろん、あるとも」

と男は満足そうに自分の髭(男には髭が存在していた)を触った。

「みんな好き好んで生まれるのだ。・・・君達の世界では、望んで生まれた訳ではない、と言うのが今流行りだそうだが、それは「嘘」だね。だが、もちろんこの世界では嘘が真実として現れる訳だが・・・」

「だから通常賢い者は「生まれようとは」しない。少しでも先賢の明のある者は、この世界には決して生まれようとはしなかつただろう。だから最も賢い者とはこの世界においては「生まれなかつた」者なのだ。・・・では次に賢い者は誰か分かるかね?」

「自殺する人間ですか？」

「・・・いや、それも違う。自殺する人間の大半は訳も分からず、この世界の掟を一つ一つつまりは、この反転という真理を認識しない者達だからね。次に賢いのはね・・・できるだけ存在を目立たさないように生きた者だ。・・・もちろん、その内に意図的に自殺したり、消えたりした者もいるがね。・・・だが、それは少数だ。こうした知者——彼らはおぼろげにしかこの世界の真理——掟を理解してはいないのだが、それでも薄ぼんやりと、臭いくらいは嗅いでいる。そして彼らはこの世界の悪(悪と呼んでもいいだろうね?)を促進させないために、できるだけ静かに、なるだけ死に近い場所で生を営んで、その多くは寿命を全うするのだよ。・・・なぜかと言えば、生まれた限りは、自殺したとしても、この世界に何らかの反響を引き起こさざるを得ないからね」

「でも、そういった人達は何故生まれたのです?彼らは知者なのでしょう?」

と僕は質問した。

「間違いはあるのだよ。どこにでもね」

と男はまたシルクハットを被り直した。

「彼らは生まれてしまっただけからしばらくして(結局、彼らはいかに生きてしまったのだ!)、自らの生に対して反省した。そして彼らはその欠点を——そう、生まれてしまったという欠点を改めようとした。だが、やってしまった事というのは取り返しがつかない。だから彼らは自分達ができるだけこの世界の傷口を広げないように配慮して生きたのだ。・・・こうした人々は現実に生きる、無数の無名の人達の中にわずかに見られるものだ・・・。では、第三番目に賢い人達はどのような人達か分かるかね?」

「・・・分かりません。「愚かな」人達ですか?」

「・・・いや、それも違う。違うね。それは一般に「賢者」と呼ばれている人達だよ。彼らは根本的には全く間違っている。だが、部分的には正しいのだよ。それがどういうことかわかるかね?」

「いいえ、全く分かりません」

「・・・そうだろう。君はまだ若い。知らなくて当然だ。・・・だがこの事を知っておく事は君にとって得策だ。何しろ君は知者に・・・途方もない知者になる可能性がある。・・・まあ、それもこの巨大な世界——君達が住んでいる世界などは砂漠の内の砂の一粒にも値しない、そういう世界においての話なのだが——とにかくそうした世界において、いくら君が知者になろうとそれは無限の中のほんのいくさりに過ぎないのだがね。・・・だがそれでもこのことは知っておく値打ちがある。蟻だって学ぶことはできる。そしてそれは意味のないことではない。・・・蟻だと言われてムツときたかね?」

「いいえ」

「・・・よろしい。話を元に戻そう。「賢者」と一般に呼ばれている人達は、皆根本的に誤った人達だ。何せ、この世界は根本的に反転した世界だ。癌切除手術を行わなくてはならない段階だ。君達の世界の比喻によればね。・・・そう、もう遅い。だが、賢者というのは前世の——そう言った方がわかりやすいだろう——記憶をどこかで繋いでいて、そしてそれに従って、君達の世界そのものを良い方向へと向かわせようとするのだ。・・・だがもう遅い。彼らは部分的には正しい。この世界——いや、君達の世界の事ではなく、もっと大きな世界の事だ——この世界では、確かにより大きな、正しい物へと進んで行く事は良い事だ。・・・だが問題はいつもそんな風に真正直に現れるとは限らないのだ。この世界が正にそうなのだ。・・・君は嵐の日に航海することは正しい事だと思うかね?航海することが正しい事だと仮定しての話だが」

「いいえ」

「・・・そう。この世界も正にそうしたものだ。この世界は難破船だ。既に遅い。努力したところでどうにもならない。・・・これはペシミズムではない。もう既に遅すぎるのだ。蟻地獄に落ちた蟻が必死にもがいて外に出ようとするようなものだ。・・・今さら、あの中心に向かって走っていきようが、そこから外にはいずりでしようが、もう結果は同じなのだ。これでわかったかね?」

「なんとなく」

「・・・よろしい。それでは最後にこんな話を付け加えよう。君はヘーゲルという学者を知っているかね?」

「いいえ。はじめて聞きました」

「まあ、良いだろう。彼はね、この世界をこんな風に考えた。この世界は否定性によって成り立っていると。人間というものは今あるものを否定することによって上昇し、進歩すると。・・・だが彼は間違えたのだよ。彼にはよりもっと大きな世界は見えなかった。・・・だから彼はやはり第三番目の賢者ということになる。一番目でもなければ、二番目でもない。彼はこう言うべきだった。「私達こそ否定的存在である。この世界は否定的存在である。だから、我々の進歩とは後退であると。我々は進歩すればするほど、そう考えれば考えるほど良いものから遠ざかり、悪くなってゆくと」・・・改善論はない。さっき言ったようにね。・・・だがそうした答えというものは——そう、沈黙となって表現されるだろう。それはそう発語する事自体がその言葉と矛盾しているのだ。だから君達の言葉で言うところの「誠実な」人間

なら、沈黙していた事だろう。・・・そのヘーゲルという人間も自分が見つけた(と仮定した)真実を無邪気に信じ込んでいたのだよ。人間というのは無邪気な、そして大部分は愚かしいものだからね・・・。何か質問はあるかい?」

僕は少し考えた後、たずねた。

「それでは第四番目、第五番目に賢い人というのはいるのでしょうか?つまり、その最初の三番に当たる人達以外はどうなるのでしょうか?」

「・・・そうだね。それは、「ない」と言わざるを得ないね。三番目以降の人間というものはいない。みんな同じ。砂漠の中の一粒一粒を区別するのが難しいようにね。・・・そう、彼らというのはこの世界で砂のように埋まっている人達だ。いわば癌細胞の一種。世界に同化し、世界の破滅を促進させる、そうした人々だね」

「・・・そうですか。それではその・・・大きな世界というのはどうなっているのでしょうか?僕たちとは違う大きな世界というのは?・・・また、僕達の世界について「正しい」や「間違っている」と判断できるのはどうしてなのでしょう?」

「・・・フフ。君は良い所を突いてきたね。そしてそれは君のような立場の人間が必ず聞かなければならない事だ。・・・いいでしょう。まず、第一の問い。これについての答えは簡単だ。「認識できない」。君達には認識できない。・・・君達は量子論の矛盾——(本当は矛盾ではないのだが)すら解きあぐねている。そしてこの問題——つまり私達の問題は、それより遙かに大きなスケールだ、と言っておこうかね?・・・それで満足だろうか?」

「それは私達には「決して」認識できないのでしょうか?」

「「決して」かどうか、は私の語彙には存在しない言葉だ。・・・だが、猿がタイプライターを叩いて「戦争と平和」を書き上げるよりはるかに難しい問題と言えるだろうね。・・・そして第二の問題。これも第一の問いに対する解答とほぼ似たものになる。つまり、それはより大きな世界——つまり、私達の世界から判断してのことだ。・・・君達は知らないだろうが、大きな世界では無数に世界の明滅を繰り返してきた。その小さな世界——大きな世界の中に入っている無数の小さな世界の中では、君達の知っているような——そう、真理と嘘や正義と悪、平等と不平等や愛と冷淡、戦争と平和といったようなものがもうそれこそ無数に背の比べっこをして、我々は様々な実験をしてきた・・・。(まあ、実験をしたのは私ではないがね。)そしてそれよりもっと大切なのは、どのような世界が良いのか?という訊だ。これは正義や真理といった概念よりはるかに大きいものだからね。君達の内には、この世界——君達の世界に知恵を持つのは自分達だけどうぬぼれているものもいるけれど、それは蟻が蟻塚を作ったことを満天下に誇っているようなものだ。・・・まあ、蟻塚は好きだがね」

「そして、こういうことだ・・・。これより君にとって重要な事を言う。あくまでも君にとってだ。だから他の人に口外してはならない。決して、ね。では真理を教えて差し上げよう——君達の世界になおして言えば、もっとも巨大な嘘を。・・・それはこの世界は失敗作だ、という事だ。それも途方もない失敗作だ。下から数えた方がはるかに早く君達の世界にたどり着く。・・・だが、そう。その下にも「無数に」失敗作はある。君達は「一番の失敗作だ!」とうぬぼれることすら許されていない」

「どうしてそういう事を僕に言おうとしたんですか?」

と僕は聞いた。

「・・・それはね、こういう事だよ。私にも同情はある。同情というものは、私達の世界にもあるのだよ・・・君は私の若い頃に似ている。だから、この事を君にふと言おうと思った訊だ。・・・そしてこれは本来やってはいけないこと、規約違反なのだが(我々の世界にも規約というものはあってね)、まあ、私の権限の範囲内でうまく収まるだろう・・・。つまりは、ふとした気まぐれでできたという訊さ。私は行かなくても、行ってもどちらでも良かった。つまりは偶然という奴だ。君は私の昔によく似ている。それで、気になって少し忠告しに来たという訊さ。・・・そして君の出生に関して不幸な出来事があって・・・もちろん、出生以前の「意志」と「偶然」に関することだが・・・」

「どんな不幸な事が?」

「それは言えない。言うことはできない。・・・生きている人間に言っても、仕方のないことだ。それは死んで——つまりあの世で、あの世でというより死後——ああ、うまい言葉がないな——まあ、その後、ということだ、その後になって理解して意味のあることだ。今の君には用がない。今の君に教えるのは文系の学生に向かってフェルマーの定理の解法を教えるぐらい無意味なことだから」

「ところでさっきの話だが——そう、君にとっての重大な事というのは聞きたいかね?この世界が失敗作だという事を君が知る事の重要な理由?」

「はい、教えてください」

「・・・よろしい。それはこういう事だ。君は今現在この世界を生きている。君はこの世界において随分と傷ついてきただろう。そしてこれからも傷つくだろう。そして君はこの世界でどれほど努力しようとする「甲斐」もなく、死ぬ。君はこの終わりを定められている世界において無力な訊だ。それはいいね?」

「はい」

「だから君が生について考える事は——いや、君達が、と言った方がいいか——君達が生について考えることは無意味なのだよ。君達がいくら生の意義について考えた所で、もはや間違った世界において、そんなものは何の意味もない

のだ。わかるかね?滝を上る鯉がいるとしよう。鯉は自分では上っているつもりでいる。・・・泳いでいるからね。だがその鯉は実際には毎秒六十キロほどの速度で「下流」に流されている、と仮定してみよう。だが、鯉というのは実際にはほんのわずかに―――そう毎秒一メートルとしようか―――泳いでいる訳だから、それが自分の達成であって、間違いでないと確信している訳だ。それが正に今の君達な訳だ」

「この世界はもうすぐ終わりにあって、それは決して揺らぐことはない。・・・そう君達の周りの人はもの見事に終焉を助長するだろう。彼らは消滅する。跡形もなく。それは永遠に消えない恐怖だ。・・・彼らは終わりを助長し、終焉に近づくとつれ、彼ら自身が終焉となる。ブラックホールに近づくと宇宙飛行士がどうなるか、知っているかね?」

「いいえ」

「まあ、よろしい。それはね・・・こういう事だ。彼らは終わり続ける。永遠に終わらないという終わりを終わり続ける。・・・ブラックホールに近づくと宇宙飛行士の腕に時計をつけてみよう。この時計の針は正常に動くが、ブラックホールに近づくとつれ秒数が進むのが遅くなり、そしてブラックホールに―――その事象の境界線に到達するや否や―――本当は「否や」という言葉も使えないのだが―――その時計の針は止まる。壊れたのではない。次の一秒が永遠にやってこないのだ。これがどういうことか分かるかね?」

「いいえ」

「実はこの時も「時」は動いている。内在しているのだ。この宇宙飛行士の内に、まだ。その事象の境界線上に時はまだあるのだ。ただ、それは動いていないのだ。―――いや、違う。違ったな。それは動かない時の中をめぐりめぐり動いているのだ。それが永遠というものだ。君にはこの比喩はわかるかね?」

「いいえ」

「・・・まあ、よろしい。そうして彼らは永遠に終わり続けるのだよ。君達の周りの人間は。彼らはハムスターのように自分で回した車に自分たちで激高して、またその車を回す。そして彼らは終焉となる。終焉とは、終わりが無いことなのだ。彼らは終わりなき終わりを歩き続けるのだ。・・・それが君達の周りの人だ。この世界はもうすぐ、そうなる。だが君に告げておくことはまだある。これだけでは、私が「同情」した事には意味がないという事になるからな」

「はい」

「それはね、君の破滅には意味がある、という事だ。君の破滅には意味がある。これがどういうことか、わかるかい?」

「いいえ」

「分からないだろう。・・・君はまだ人生を始めたばかりだからな。君はいくつになった?」

「今年で十八です」

「・・・そうか。その年にしてはよくやったものだ。ま、だからこそ、私はここに来た訳だが。・・・君にももうすぐ分かるだろう。年を取るといことが盲目的になり、知恵を失い、衰え、排他的になるという事が・・・。本当は人は年と共に知恵を身につけて進歩をしなければならない。そのはずだ。そうだろう?だが、事実は逆だ。人は孤独に死ぬ。ひとりぼっちで。孤独にね。だが・・・それだけではない。私が君に言いに来たの正にその事なのだから」

「さっきも言った通りに、君は間違いなく破滅して死ぬ事となる。それは間違いなく確実な事と言っていいだろう。・・・とはいえ、未来は予測する事は我々にもできない。・・・だがそれはこの世界で「リンゴは木から離れるやいなや地面に落ちるだろう」とか「賢者は間違いなく嘘つきのレッテルを貼られて殺され死ぬだろう」といったような真理と呼ばれているものと同じくらい確実なものだ。弾丸を百発打ち込んだら、死ぬというようなものだ。死なない可能性もないとは言えまい?・・・そういうものだ」

「だが、そう・・・先にも言ったように君の破滅は意味がある。その事を君は覚えていたまえ。この事を希望と呼んでもいい。・・・実はね、私もそうなのだよ。・・・実は私も君達と同じような別の世界にいて、私は一人の生命体――まあ、君達と似たようなものだ――において、一人壮大な破滅を繰り広げたのだ。私は壮大に破滅した。・・・それは全くどうしようもないくらい救いのない破滅だった。だからこそ、私はここにいるのだ。それがどういうことか・・・わからないね。実はそれはないことではないのだが、つまり、私には見込みがある、という事になったのだ。そして今、この立場を私は手に入れたのだよ・・・。私に打算はなかった。打算がなかったという事が彼らのお気に入り召したのだ」

「つまりは君にもその可能性がある、という事だよ。だが君がそう思った瞬間、自分が救われるかもしれないと思った瞬間、君はあの「終焉連中」の一派に加わらなければならないがね。そして地獄よりもっと深い所で闘争を・・・つまりは「天国を求め続ける」という最悪の罰を与えられるという訳だ」

「だから、君は壮大に破滅しなければならない。君は誰よりも勇気と胆力を持ち合わせている。・・・だが、君は自分が誰よりもひ弱でいて、臆病だと自分で思いこんでいる。・・・それは君が無知だからにすぎない。・・・君はまだこの世界が反転している事に気付いてないのだ」

「そう、そういう事なのだよ。・・・実はね、君に言ってなかったが、この世界にほんのわずかに、そう、ほんの僅かにこの世界の秘密を――私が言った秘密を直覚して、この世界を抜け出した者がいる。・・・それは無名の者が二人、そして後に有名になった者も二人、だ。この数値に意味はないがね。・・・とにかく、君はこの反転した世界において壮大に破滅しなければならない。そう義務づけられているんだ」

「・・・そして、いわば、孤独に闘ったものももっとも悲惨な結末を迎えるものだ。君はこの事に留意したまえ。即ち、君は君自身の破産が、壮大な死が近づけば近づくほどにゴールが近いのだという事をね。これは生きるための希望となると言っても良いだろう。君は破滅と死に向かって歩きたまえ。そうすれば、何事かが待っているだろう。」

「さて、私の話はここで終わりだ。本当はこんなことは語りたくはなかったんだが・・・まあいい。どうにかなるだろう。・・・そうそう、そしてもう一つ、もっと大切な事を言っておこう。ここは反転した世界だと言ったね」

「はい」

「では反転していない世界とはどんなだろうか?想像がつくかね?」

「いいえ」

「・・・よろしい。それはね、ここよりもずっと地獄なのだ。天国である故の地獄。・・・そこでは人は――いや人じゃないな――は、罪を手に入れるためにあらゆる犠牲を払おうとするのだ。だが、払うべき犠牲もない世界では、それすらも叶わない。だから人は進んで罪を作ろうとするが、それは次の瞬間にはもう洗い清められてしまう。すべての美しい御魂によってね・・・まあ、まだ「こちら」も試行錯誤の段階だと言う事だ。・・・おっと、もう時間だ。・・・私の時間ではない。私の時間はブラックホールの宇宙飛行士のように止まっているからね。君の時間だよ。君は。・・・君はもうすぐ目覚める。すると君は私が今日しゃべった事を全て綺麗さっぱり忘れてしまうだろう。・・・是非、そうしなくてはいけないからだ。何?それでは意味がないではないか、だって?・・・いや、そういう事はないのだよ、君。全ての物事は忘れられた後に残る事に意味がある。・・・人間が海馬などをいじくり返して「記憶」だと言っているのが馬鹿らしいよ。もし細胞が兆年単位で記憶していなければ、そして素粒子達がこの宇宙の彷徨の記録を心に刻んでいなければ、この世界は君達が破滅させたよりもっと味気ない世界になっただろうね・・・。まあ、実はそういう世界もあるのだが。・・・だがその世界は君達の世界よりもっとマシなのだよ。・・・まあ、この話はまた今度にしよう。「今度」があれば、の話だが。・・・君は目覚めてしまえば、全てを忘れる。そして全てを忘れたからこそ残ってものが今日からの君を変えるだろう・・・君は決然と破滅に向かっていくだろう・・・それじゃあね!」

そう言って男は「消えよう」とした。(僕には何故だかそれが感じられた。)僕は一つ心残りがあったので、慌てて男を呼び止めた。

「待ってください!」

「なんだね?もう時間がないよ!」

男は既に半分消えかかっていた。

「あなたは「僕」なんですか?」

・・・男はニヤッと笑ってそのまま消えた。

・・・目が覚めると全ては元通りだった。僕は歯を磨いて、母の作ったトーストをかじってから学校に登校した。昨日見た夢の事はすっかり忘れていた。